

NHK大河ドラマ「軍師 官兵衛」の再生

一年間通しての大河ドラマ「軍師 官兵衛」も、六月から七月でようやく折り返し点にきました。心配なのは数え年五十九歳の官兵衛（黒田孝高）の人生で、まだ三十四歳にしか到達していないことです。残り二十四年、この間に豊臣秀吉の天下統一が入ります。中国征伐（毛利氏）、四国征伐（長宗我部氏）、九州征伐（島津氏）、関東征伐（北条氏）……官兵衛が軍師としての本領を發揮し、合戦に明け暮れた日々で、実に見せ場が多いのです。

そして二度に及ぶ朝鮮出兵、関ヶ原の戦い。残り半年では時間が足りないのではないかと、いきおい飛び飛びに描くしかないのではないか、と思えます。前半で最大の見せ場は官兵衛の再生ともいえるべき出来事でした。

- 5月11日 第19回 非情の罟
- 5月18日 第20回 囚われの軍師
- 5月25日 第21回 松寿丸の命

寺政職を動かします。小寺家では官兵衛以外の家臣は毛利につくべしという意見で、官兵衛は孤立していましたが、官兵衛は意見を変えません。ついには忠誠の証として、自分のたった一人の子・松寿（番組では松寿丸）を人質として、織田信長に差し出します。官兵衛が新興勢力織田信長の将来性を買っていたことは明らかですが、それは官兵衛の先見性を示してもいいです。それはデータや理屈ではなく、ある種の直感であったかもしれません。軍師に最も必要な能力（ヒラメキ）を有していることを思わせます。ところが、信長の家臣、伊丹有岡城の荒木村重が信長を裏切り、毛利方につきます。信長と小寺家の間に新たに毛利方が出現したのですから、小寺家は東の村重、西の毛利にはさまれることになり、政職は動揺します。ドラマでは片岡鶴太郎が臆病で、政治に関心もなく、利己的に陰謀を企むばかりの政職を演じていましたが、鼻を赤くし、いつも上目遣いに見ている姿が印象的でした。これは個性を際立たせるために過剰に演じていたもので、家臣の信頼を失うような人物なら、敵に襲われる前に、家臣にその地位を奪われていたことでしょう。当時は下克上（下位の武士が上位の武士の権力を奪うこと）の時代で、信長にしても下克上に次ぐ下克上で這い上がってきたのです。

信長は尾張の国の半国を支配する織田家の分家でした。まず本家である、半国の主の地位を奪い、次に残り半国を奪い（尾張国の統一）、隣国美濃の国を奪い、近江に進出して安土城を築きます。信長が天下布武を宣言したのは足利将軍の地位をおびやかすことを意味しますから、まさしく下克上です。

- 6月1日 第22回 有岡、最後の日
- 6月8日 第23回 半兵衛の遺言
- 6月15日 第24回 帰ってきた軍師

第19回で官兵衛は有岡城に囚われの身となり、絶望の内に一年一か月を過ごします。第22回で官兵衛は救出され、第23回で家族との再会を果たし、第24回で秀吉のもとで軍師（参謀）としての活動を開始します。土牢の中で過ごした一年一か月を第19回〜第22回まで4回をかけて描き、第23回で盟友・竹中半兵衛が死に、第24回で官兵衛は半兵衛なき後、秀吉のたった一人の軍師としての自覚を強くします。

秀吉の妻・おねが秀吉に向かって「官兵衛殿を手放してはなりません」と叫ぶのは象徴的でした。事実、秀吉は官兵衛と組むことで、ライバルを蹴落とし、一歩一歩天下取りに近づいていきます。官兵衛の人生の大きな節目、転換点であり、日本史の上でも転換点に違いありません。確かに官兵衛が有岡

しかも実の兄弟、義兄弟との骨肉の争いでもありません。信長は弟（信勝）を殺し、妻の兄（斎藤義龍）と戦い、妹の夫（浅井長政）を討ちました。

非情な性格の信長でしたが、一面では同時代の人々の常識を裏切る、新しい時代を切り開く力を持つていました。確かに信長という個性がなければ天下統一へ踏み出すことはできなかったでしょう。桶狭間の戦い、楽市楽座（商業の育成）、天守閣を持つ壮大な安土城の築城……どれをとっても常識はずれの発想のたまものです。

小寺政職が毛利方についたことこそ、常識にかなったものでしょう。官兵衛が一貫して信長につくことを主張したところに、新しさへの共感がかいまみえます。

政職が動揺したことで、官兵衛は困った立場に追い込まれました。小寺家が毛利方に寝返ると、信長は人質の松寿を殺すでしょう。松寿の命がかかっていただけでなく、官兵衛は毛利方につけば小寺家は滅びると確信を持っているので、政職に翻意を促します。政職は「荒木村重が再び信長の側につくなら、自分も信長につく」と条件をつけます。このため、官兵衛は単身、有岡城に向き、村重を説得しようとしています。政職は官兵衛を有岡城に送り込むとともに、村重に官兵衛の殺害を依頼したというのですが、その真偽ははっきりしません。村重がなぜ官兵衛を殺さなかったのかも歴史の謎の一つです。ドラマでは政職の陰謀説に立ち、第19回を「非情の罟」と題しました。

官兵衛が有岡城で捕らわれたことで、父・職隆は苦しい立場に置かれました。官兵衛を助けるには毛

城落城より前に土牢で死んでいたら、天下人秀吉は歴史に存在していなかったかもしれません。ため池に面した、狭くじめじめした土牢で一年余を過ごしたことで、有岡城から救出された官兵衛は足が不自由になり、頭もできものができていました。岡田准一演じる官兵衛は杖を頼りに歩き、顔にはよく見ると、青くあざになった部分がありました。

そもそも官兵衛は、御着城主・小寺政職に仕える姫路城代・黒田職隆の子として、姫路城に生まれました。小寺家は播磨（兵庫県）に多くいる城主の一人に過ぎず、黒田家はさらにその家臣でした。播磨一國が小大名の領地に分かれていたこと、西に中国地方の十か国を有する大人名・毛利家があり、東に天下布武（天下統一）を掲げた織田信長が勢力を広げていたことから、播磨の領主たちは毛利につくか、織田につくか、選択を迫られました。

この時、官兵衛は織田につくという選択をし、小

利方につくしかなく、しかしそうなると人質になっている、孫の松寿は信長に殺されてしまうからです。子の官兵衛を助けるべきか、孫の松寿を助けるべきか、二つに一つしかありません。ドラマでは職隆（柴田恭兵）が涙を流して苦悩するのですが、貝原益軒『黒田家譜』では職隆は松寿を助けるという決断をします。官兵衛は主君の命にしたがって使いたので、殺されるのは覚悟の上で有岡城に乗り込んだものと言えます。官兵衛が殺されても不名誉ではありません。一方、松寿は信長への忠誠のしるしとして人質になったものですから、官兵衛を助けようとする、信長との約束を反故にすることになり、武士としてあるまじき態度ということになります。

実際には松寿は殺されませんでした。官兵衛が裏切ったと判断した信長は松寿を殺せと命じますが、竹中半兵衛が自分の領地にひそかに匿ったからです。官兵衛が有岡城から救出された時、半兵衛はすでに病死していました。生前の半兵衛は官兵衛が生きていたことも、裏切っていないことも知ることはありませんでした。しかし官兵衛が裏切っていないという確信は揺らがなかったのだと言えます。

松寿が殺されていたら、私たちの住む福岡県はまた別の名前と呼ばれていたことでしょう。松寿は長じて黒田長政となり、関ヶ原の合戦の功により中津から名島へと移ります。その後、城と城下町を築いて「福岡」と名付けます。それが福岡県・福岡市の名前の由来です。長政がいなければ「福岡」も存在しなかったはずなのです。